HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ケアの科学と価値 : 応用科学哲学による看護学の再編と価値中立化を図る思考法の検討 [全文の要約]
Author(s)	新納, 美美
Citation	北海道大学. 博士(理学) 甲第12493号
Issue Date	2016-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/64434
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。【担当：理学部図書室】
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Mimi_Niiro_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学 位 論 文 の 要 約

博士の専攻分野の名称：博士（理　学）　　氏　名：新納　美美

学 位 論 文 題 名

ケアの科学と価値 ― 応用科学哲学による看護学の再編と価値中立化を図る思考法の検討

本研究の主題は、ケアの科学である看護学において倫理的価値負荷性の問題を整理し、倫理理論との融合的接続によって看護哲学のアノマリーの根本的な解決を図り、実践を支える精神と行為の一貫性をはかることの出来る解答を導くことである。研究課題の着想は、反社会的行為の改善が健康支援の一環として求められる対象者への看護活動において、現代看護哲学が看護の本質であり倫理の具現とみなす「ケアリング概念」の適用が極めて困難であることの観察事実にある。看護学における理論的知識は現実の実践を支えるものであり、そのアノマリーは実践者の精神と行為を乖離させることがある。看護哲学者たちが看護の本質として強調する共感性・気遣い・慈悲などケアの対象に対する保護的で積極的な向社会的構えや、ケアの過程に伴う忍耐への要求は、反社会的行動特性のある対象者をケアするナースたちにとって過酷かつ心身のリスクが伴うものである。必要な技術や対策は実務的にはとられるものの、ナースたちに教育されている理論はそれらに対して矛盾がある。

看護学における理論と実践の乖離の問題は古くから存在しているが、かつてはこれが看護学の外側からの批判にさらされることはなかった。しかし、近年、科学哲学者 M. Risjord が、看護学の知識体系に対し、倫理的価値負荷的な科学領域であると指摘した。その上で、彼は、看護学の知識形成が、倫理研究と科学研究に分かれてしまっていることが、結果的に現実と乖離した知識の生産につながっているとし、看護学は膨大な知識を生産しながら自らの専門領域を描くに至っていないと批判した。この指摘は、本研究の問題意識と深く関わっており、Risjord の批判に応じて知識を検討し直すことが本研究の課題にも解答を与えるものと考えられた。しかし科学哲学者と同じ水準で議論したのでは、看護学内部の現場における問題の解決に至る解を与えることが困難である。そこで、本研究では、応用科学哲学という立場をとり、「問一. 看護学の専門領域はどこにあるのか」「問二. 看護哲学のアノマリーは何故生じたのか」「問三. 倫理的に価値負荷的な科学領域と倫理学はどのように関連し得るか」の 3 つに解を与えながら議論を進め、最終的にアノマリーである反社会的行動特性を伴う対象者へのケアが、合理的で一貫した思考法と行為によって営まれるための理論的解を導くこととした。

はじめの二つの問いに対しては、看護学の内部の資料分析とその結果をふまえた議論によって解答を与えた。まず、看護学の知識のもっとも重要な部分である固有の専門領域の特定のため、看護学の基礎論として F. Nightingale が認識していた看護の規範を分析した。看護学の原点と認識される Notes on Nursing に用いられている規範言語を手掛かりとして記述内容の意味を検討し、看護学がどのような性質を持った学問領域なのか基礎レベルで見直し

た。その結果、Nightingale は看護の専門能力が観察と推論であるという規範を持っており、科学として誕生したと言えた。しかし、同時に、看護が健康を支えるシステムの管理（management）であり、その行動が道徳的であという規範も持ち合わせていた。そのため、看護学は価値を切り離すことができない科学と結論された。一方、道徳的行為を導く合理的思考法（倫理）に関しては看護学の基礎には見出すことができなかった。次の段階として Nightingale 以降の知識形成の全体的な流れを俯瞰し、Nightingale 看護論が後世の看護学の発展の中でどのように生かされてきたのか系譜を追った。その結果、看護学は Notes on Nursing から 100 年以上経てようやく Nightingale の認識に追いつき、看護を構成する要素の全体を掌握することができたのだと考えられた。全体を俯瞰した結果、看護の全専門領域に共通する固有の専門性（問一の解答）は、Nightingale の認識を呼び戻し、個々人の健やかな生存（共存）を支えるシステムの管理とみなすのが妥当と結論づけられた。

固有の専門領域が特定できた後は、具体的な価値の議論に入った。まず、科学哲学における科学と価値の議論をふまえ論点を整理したうえで、看護学が直面している価値の問題は主に倫理的・社会的価値であること、それが科学に負荷されることによって科学の中に証拠に拠らない観念的な問いが戻って来るリスクであることが確認された。また、科学哲学の科学と価値の議論において考案されている自然科学と倫理的・社会的価値の問題の解決法を参照し、看護学においてふさわしい倫理的・社会的価への向き合い方を検討した。看護学の知識の生産システムをあらためて検討すると、ケアの理想化の流れを制御することが実質的に困難だと考えられ、また看護倫理もそれを適正化する力を持たなかった。そのような知識生産システムの不備に加え、看護学には倫理的価値の問題を検討する議論の流れが無く、アノマリーはこのような知識の生産体制によって生じているのではないかと考えられた（問二の解答）。看護学が事実に基づいて他者に貢献し得る科学で在り続けるためには、価値の中立化を図ることのできる科学領域（value-neutralizing science）として歩めるよう理論的整備をする必要があると考えられた。そこで、看護学に固有の専門的な思考に相乗り可能な倫理理論との架橋を進めることとした。

看護学と相乗りが可能な倫理は、知識構築の経過や看護哲学で重視されてきた倫理の考え方を検討することによって「義務論を許容する功利主義」から選択することが適切であると考えられた。そして、最終的に言語的直観に基礎づけられた R. M. Hare の理論が選択された。その後は、Hare 理論が提示する道徳的思考法を精査し、看護実践の文脈にとっての適切性を検討した結果、看護学の考え方との相乗りが可能であると判断された。議論の最終段階においては、倫理学と看護学という学問的には異質な両者の知を接続して、看護活動に反映させるための議論を展開した。この際、全体を研究者自身の認識の中に存在していた G. Bateson 的世界観を用いて、それぞれの生命線ともいえる重要な文脈を段階的に合わせて行った。まず、前半の議論の解の一つである「看護学全体にとっての固有の専門性」を現代の看護活動に戻し、Nightingale の科学的な看護の認識に準じ、その構造をモデルとして示した。看護学の科学的で合理的な思考と実践的で直観的な思考の二つの階層に、Hare の思考法の二層構造を重ね、その際に生じる難点を解決していった。難点の解決にあたっては、互

いの文脈を損なわないように補完できる要素を補った。難点を乗り越える議論が完了した後、Hare が相乗りした新たな看護の考え方を事例に適用し、アノマリーの解決をシミュレーションした。Hare 理論の相乗りによってアノマリーは解消し、反社会的な攻撃行動に対峙するナースの行為は、根拠を与える理論的説明との乖離が無く、対象への有効なケアを導き出せるものとなり得ることが確認できた。倫理理論と看護の実践的な知識を架橋する一連の議論を振り返り、その軌跡から、倫理的に価値負荷的な科学領域と倫理学とがどのように架橋し得るか（問三）解答を与えた。本研究を一つの事例として考えた場合、倫理学の知識を現実の世界で科学領域の営みに活用するには、倫理理論側が現象の中でシステムを成せることが要件の一つになると考えられた。また、倫理学側と科学側とが、互いになくてはならない要素を補いあえる関係で、現実的な活動を支える思考法を稼働させられることが重要だと考えられた。

人間科学の一領域であるケアの科学領域と価値の領域を架橋する本研究の取り組みは、実践における切実な問題解決の必要性から立ち上がったものである。一定の成功をみた一方で、このような方法論は、学問的には本来あり得なかったものでもある。本研究の取り組みを支えた応用科学哲学という立場は、これまで産み出されてきた知識を融合的に活用するための開かれた議論を成す場としてふさわしいのではないかと考えられた。